

記述テキストからあきらかになる学生の音楽観

Students' Views of Music That Become Clear from Their Description Texts

次世代教育学部こども発達学科

堀上みどり

HORIKAMI, Midori

Department of Child Development

Faculty of Education for Future Generations

Abstract : This study clarifies the students' views on music based on their responses to the question "What is music?" In the class, I asked them the question, "What does music mean to people?" and we considered the relationship between people and music. I analyzed the students' texts using the SCAT analysis method and coded them as follows: (1) explanation of "music," (2) psychological effects, (3) the meaning of music's existence, and (4) "The Otoasobi Project." The results of the analysis were as follows: (1) it is difficult to define the music because it is a unique event for each person; (2) many students are helped by the psychological effects of music in their daily lives; and (3) music is crucial and indispensable for individuals, and it creates connections and communication for groups, and it's a means of improving the environment for society. As for (4), it became clear that even though the music of "The Otoasobi Project" was unfamiliar to the students and sounded disorderly, it was regarded as "music that everyone enjoys freely," without scores or stereotypes.

Keywords : view of music, SCAT, music and emotion, music in education

1. はじめに

音楽とは何か。物理的には空気の振動のことであり、それを人の耳が感知することにより「音」が生まれ、その「音」に何らかの秩序、枠組みが与えられた、ある切り取られた時間を指すのかもしれない。

古代ローマの時代から、音楽を定義しようとする試みがおこなわれてきた。当時は、音高の違いがわかる能力、音の動きをよくととのえる知識のこと¹⁾とされ、音そのものではなく人間に備わった能力としてとらえられた。中世には、歌うことと関連づけられた定義がみられ、正しく歌う技術が重視された¹⁾。バロック時代になると、音楽は学問であり、芸術であると定義され、快い音の結合が人間に良い影響を与えることが記された¹⁾。古典派の時代には、「音楽は、情熱的な知覚から生まれ、したがってそれを描写する音の連続」²⁾ととらえられた。ロマン派以降は、「音の運動的遊戯」³⁾、「響きつつ動かされる形式」⁴⁾、「事物の間の秩序を樹立し、特に人間と時間との間に秩序をうち立てる現象」⁵⁾等と定義され¹⁾、音楽そのものを言葉によって描写し、現象学的にとらえようとする試

みがおこなわれた。

今日、音楽とは何だろうか。不協和音にとどまらず、様々な物音が音楽に取り込まれ、とうとう「音がないこと」も音楽である。しかし、筆者も含めた音楽大学でクラシックピアノを学んだピアノ習熟者の多くは、芸術家が作曲した芸術作品こそが音楽であり、それ以外の音楽はそれらに比べて劣っているととらえる傾向にある。

では、保育者養成課程の学生にとって、音楽とはどのようなものだろうか。本稿は、コロナ禍の影響により、施設実習に代わる学内実習の一部としておこなわれた、音楽療法オンライン授業の「音楽って何？」という問いに対する学生の記述テキストを、質的分析手法SCATを用いて分析した結果から、学生の音楽観をあきらかにするものである。

ここでSCATについて説明する。大谷によって開発されたSCATは、'Steps for Coding and Theorization'の略語であり、〈1〉データの中の着目すべき語句を記入する、〈2〉前項の語句を言いかえるデータ外の語句を記入する、〈3〉前項を説明するための概念、語句、文字列を記入する、〈4〉テー

マ、構成概念を記入する、の4段階を経て、記述データをコード化する分析手法である(大谷:2007)。「比較的小さな規模の質的データの分析を、短い指導を受けただけで自立して始められるようになる」(同上)ため、質的データをただそのまま記述してきた筆者のような研究初学者にとって、取り組みやすい分析方法といえる。コード化された記述を手掛かりに、今一度、学生にとって音楽とは何かについて考えたい。

最初に、学生の音楽観に大きな影響を及ぼしてきたと考えられる学校教育の音楽と、授業で取り上げた‘音遊びの会’の音楽について述べる。そして、授業で使用したスライドを提示し、各コードの学生の記述の一部を掲載することにより、学生の音楽観をあきらかにする。

2. 対置される2つの音楽

2.1 学校教育の音楽

2.1.1 従来の音楽教育

塚田(2017)は音楽教育の原点とは何かについて、文化教育であり、児童(生徒)の文化化—子どもの側にそもそも何かを学んでいるという意識がなく、誰にも強制されない自発的な遊びの中で、楽しみながら習得し、常にそこに子どもたちの笑顔があるような自然体の学習の在り方—であると述べている。しかし、日本の学校音楽教育の現状はどうだろう。畠澤(2012)は、幼児期から小学校低学年頃までの子どもにとって、音楽は彼らの生活の一部であると思えるほど、音楽、とりわけ歌うことが好きであるが、進級するにつれ音楽の授業が嫌いだという子どもが増えてくることを、日本の音楽教育の課題として提出している。また、畠澤が担当した教員養成学部の学生の多くは、音楽の授業に対して消極的で、コンプレックスを持っていたが、それらの理由を、学校の音楽教育の技術偏重の結果だと述べている(畠澤:2008)。誰でも自分にできないことを延々と課せられれば、嫌になる。その上、できないのは努力が足りないからだとか叱責されれば「やめた」となる、その心情は十分理解できる。教員は、時には我慢して、学習指導要領にはカリキュラムとして組み込まれていない、精神的発達面や音楽的センスの発達を促す指導—「子ども(学生)目線に立った、共に音楽する喜びを味わうような心でおこなう指導—」(同上)を考える必要がある。

筆者は、子どもたちが学校の音楽を嫌いになる別の大きな要因は、使用する教材の音楽そのものと、子ど

も(学生)の音楽性および音楽的嗜好のミスマッチであると考えられる。日本の学校音楽教育は、1872年、「学校」の設立とともに、唱歌教育として始まった。1879年音楽取調掛が創設されると、1880年に外国人教師メイソンが雇われ、ピアノ学習のために『バイエル』が持ち込まれた。『バイエル』は、小さな子どもにピアノの手ほどきをするときに親が用いるための教材である。西洋芸術音楽古典派の楽曲に通じる様々な音楽的、技術的要素を学ぶことができる一方、音楽があまりにも教条的で、常套的で、音楽に必要な幻想性がまるでなく(佐藤:1996)、無味乾燥でおよそ子どもの内的イマジネーションをふくらませるようなものではない(カヴァイエ、R・西山:1987)という批判もある。筆者は、学校教育の音楽にこの『バイエル』が大きな影響を与えたのではないかと考えるが、ここで第8次学習指導要領⁶⁾の歌唱教材の音楽について検討する。

まず、音楽のリズムはどうであろうか。2拍子、3拍子、4拍子…とあるが、筆者には、メトロノーム的、機械的な、単調で停滞したリズムに感じられ、それらはあくまで拍子である。しかも1拍目は強く、2拍目は弱く…というように、音楽そのものに、そして感受する個人によっても多様であるはずのリズムを、型にはめ一律同じものとして学ぶ。そのようなリズムから、音楽本来の躍動感(ノリ)は生まれるのだろうか。

ハーモニーについて、共通教材の歌唱曲を調べてみると、わらべうた、日本古謡以外はすべて長調の曲で、1、2年「うみ」「かたつむり」「日のまる」「春がきた」「夕やけ小やけ」「虫の声」で使用されているのは主に〈I・V・V₇・IV〉の和音⁷⁾である。3、4年「茶つみ」「ふじ山」「春の小川」「とんび」「まきばの朝」「もみじ」では、上記和音に加え〈II_m・VI_m〉の短三和音⁸⁾が使用される。5、6年「こいのぼり」「スキーの歌」「冬げしき」「おぼろ月夜」「ふるさと」「われは海の子」ではさらに、〈V₍₇₎/V・V₍₇₎/VI〉等の借用和音⁹⁾が用いられるようになり、多少陰影が感じられる。しかし、ポピュラー音楽に使用される四和音以上の響き¹⁰⁾に比べ、上記和音が描写し得る「もの・こと」は限定的であり、複雑になっていく子どもたちの心情に寄り添う音楽にはなり得ない。教材の音楽そのものに『バイエル』が大きく反映されているといえるだろう。

2.1.2 これからの音楽教育

有元 (2017) は、10歳以上の日本人で平素、楽器を演奏する人は5%、歌っている人は2.8%しかいない¹¹⁾ことをあげ、音楽教育の効果に疑問を投げかけている。そして、ポピュラー音楽の在り方が文化参加による学習を基にし、「暗記すること、耳コピーすること、装飾すること、即興すること、アレンジすること、作曲することなどの様々な活動が不可分」(同上)であり、小学校高学年にもなると、子どもたちはドラマや映画の主題歌、J-Popなど文化(社会)における音楽を好んで聴き、吸収することから、ポピュラー音楽を教材に用いる可能性に言及している。リズム、ハーモニー、メロディーは、学校外の文化(社会)における音楽の方が遥かに複雑だが、そちらの方が聴いて歌って楽しいことは確かである。

小川 (2017) は、「プラクシス(実践)としての音楽一人間の社会行為/社会と自己の相互作用による表出、演奏者と聴衆が共に作り上げる行為/常に進行形であり、非言語的・身体的で、言語を介さずに意味を構築/音楽の価値は相対的/音楽の理解とチャレンジがマッチした時、フロー¹²⁾がもたらされ、幸福、自己成長、自己理解がもたらされる」という現在の音楽教育哲学を紹介し、それに基づいた音楽の授業の特徴を「①音楽行為が最優先される、②カリキュラムが柔軟となり、目的が固定されない、状況に応じて教師が自在に指導を変える、③指導者と学習者・学習者間の共同・協同作業となる、④協力してフローを作り、チャレンジのレベルを上げながら継続させる、⑤自己成長、自己理解、他者理解、幸福が結果として得られる」と述べ、(1)音楽は嗜好の対象ではなく、身体社会化、社会の身体化のプロセスである、(2)自らを社会の中に投げ出す演奏行為は、一方的な自己の内面の表出ではなく、社会を自らの身体に取り込む行為であり、演奏行為後の自己認識につながる、(3)音楽における知覚と感受は渾然一体となっていて、読譜から学ばせるべきではないし、無限にある音楽の諸要素から、音楽の三要素¹³⁾等に限定して認識させるやり方は、個々の内的現実を軽視している、(4)言語活動の充実に関しては、音楽を言語に置き換えることはできないし、言語能力の訓練のための授業ではないのでやめるべきである、(5)情操教育の一環であるとする考え方もやめるべきである、とカリキュラムの課題を指摘した上で、「教育の中の音楽」から「音楽の中の教育」へシフトすることを提言している。そして、「音楽で子どもたちを幸せにする」ことを第

一義とし、群を抜いて「好きな授業」となることを目指すには、子どもたちが純粋に音楽を楽しむのとは全く逆の方向に身体構造ができていく¹⁴⁾音楽の先生たちが、子どもたちがどのように音楽を学び、喜びを得るのかということをも、もう少し掘り下げて考えなければならぬと述べている(小川:同上)。

上記の学校教育の音楽に対する問題意識は、そのまま保育者養成課程において筆者が担当する授業にも当てはまり、授業のためにピアノが嫌いになる学生が現れる状況を何とかしなければならないと考える。教育的で退屈な音楽実践にフローは生じない。特に導入期の、学生の音楽性や心情を全く無視した教材の使用を見直すべきではないだろうか。

2.2 ‘音遊びの会’の音楽

音楽療法は、クライアントの状態を改善、維持、回復させるために、音楽そのものの体験やそれを通して築かれる様々な関係を、変化を促すための力として用いる(Bruscia:1999)。そして、その音楽には、「カタルシス¹⁵⁾的価値、投影装置¹⁶⁾としての価値、防御を回避する能力、言語以前の領域にある心の葛藤に達する能力、トランスパーソナル¹⁷⁾な性質、癒やす性質、情緒的表現を促進する力、移行的対象¹⁸⁾として機能する能力、象徴的な価値を強調する力」(Aigen:2002)が備わっているとされる。

‘音遊びの会’は、一般募集による13名の5歳から34歳までの自閉症、ダウン症、ウィリアムズ症候群などの障がいのある人と、7名のゲストの音楽家、4名の地元の音楽家から成る「音遊びプロジェクト」として、沼田¹⁹⁾が立ち上げ、現在に至る(沼田:2017)。その目的は、「音楽療法家、即興音楽家、障がいのある人たちがともに即興演奏をおこない、新しい音楽表現の地平を開拓すること」(同上)、「即興演奏を中心にした音楽療法において障がいのある人と創られる表現を、治療の過程ととらえて守秘義務の内にとどめておくのではなく、社会の多様な人々と共有すること」(同上)、そして障がいに関する問題も、社会の様々な人と共有することである(同上)。また、「治療効果に焦点が当たることにより音楽的内容が考慮されなくなる」(同上)を避けるため、音楽療法とは位置づけず、音楽家・音楽療法家・保護者・クライアントを併置させ、音楽的にも対等な新たな関係性を探ろうとしたという(同上)。このような考え方の背景にあるのが、コミュニティ音楽療法²⁰⁾であり、「クライアント個人の治療課題のみを問題にするのではなく、社会

とクライアントの様々な関係の中で障がいや病気等の問題をとらえていこうとする態度」(沼田：2010)である。また、Smallのミュージッキングという概念—「音楽を作り、演奏し、聴き、練習し、あるいは踊るという、能力を問わない音楽の一連の行為全てを表すものであり、音楽の意味はそれらの過程に関わった人々の関係、個人と社会の関係、および人類社会と自然界の関係を通して明らかにされる」(沼田：2017)という音楽実践のとらえ方—は、「規範となるモデルや理論に基づくのではない社会文化的側面を考慮した新しい実践」(同上)、すなわち‘音遊びの会’の活動の意義を説明することができる。

‘音遊びの会’の音楽活動は、集団自由即興による演奏である。音楽療法的にみれば、この活動は「自己の解放、まわりを取り巻く世界との様々な関係の樹立、発達的な成長」(Bruscia:1999)、「集団における個人の社会的な統合」(同上)を目標とし、クライアントの知的発達—「感覚の気づきと知覚、注意などの知的作業、観念の組織化、記憶力、感情の理解」、身体的発達—「粗大運動、微細運動、感覚と運動の協応」、社会・情緒的発達—「自己の認知、コミュニケーション、自己表現、他者との一体化、対人能力、集団の中での調和」を促進するために、音楽本来の持つ関係性を用いるという(同上)。

集団における音楽は、一人一人の音楽が互いに影響し合い、その全てが集団の音楽に貢献する(同上)。そして、集団の音楽が一つの実体となったとき、今度はその音楽が一人一人に影響を与える(同上)。また、集団における音楽的関係、個人と集団の統合は、一人一人の音楽的自己感知に依存し、加えて、メンバーは自分の音楽的過去と心理的な現在—「様々な連想、思い出、好み、気分、感情が入り交じったもの」を音楽に持ち込むという(同上)。

実際の‘音遊びの会’の音楽はどうだろうか。決まったリズム、ハーモニー、美しいメロディーのある、一般の聴き手にわかりやすい音楽とはかけ離れた、無秩序で難解な、学生にはほとんど馴染みのない音楽であると推察される。しかし、共演した演奏家は、「音のタッチがすごくいい人たちが集団でいる／時々には完全に理解不能な演奏もするけど、でも、驚くくらいきらきらと輝くような音も出してくれる」と評価している(沼田：2017)。保護者も含めた‘音遊びの会’のメンバーは、自分たちの演奏だけではなく、その場の「成り行き」「状況」—予測不可能な、想定外のことが次々と起こる「空間」全て—を楽しめるよ

うになったのだという(同上)。

筆者は、何度か公演に足を運んだが、マイクを握って挨拶し、プログラムの紹介をしているメンバーが、障がいの有る人か無い人か、ふとした瞬間にわからなくなるがあった。音楽的にはフリージャズ、フリーインプロビゼーションとして十分に成立し、彼らの楽器や音に対する姿勢と生み出される音、その音に辿り着くまでのプロセスに、感動したことを思い出す。

3. 授業の概要とSCAT分析法

3.1 授業の概要

授業は2020年9月4日1限、学内施設実習の一部として、オンラインでおこなわれた。参加者は学生41名である。即興演奏を用いた音楽療法を説明する前に、ヒトにとって音楽とは何かを考えた。

★1

〈ヒトと音楽〉

音楽って？ 物理的 ➡ 空気の振動

心理的 ➡ 感情、情動を生じさせるもの

リズムの始まり…胎内できく母親の心臓の音
メロディーの始まり…胎内できく母親の声

図1：スライド①

図1：いくつかの観点で音楽について説明し、生まれる前からヒトは音楽に触れていることを述べた。

乳児と、敏感で応答的な母親の間の、親密なコミュニケーションが音楽性を育み、表現行動の基礎になる。

生後4ヶ月の乳児…協和音と不協和音を判別。
ゼントナーとケイガン (1996)

生後6ヶ月の乳児…メロディーのある音調曲線が変化すると心拍が変化する。
チャンとトレハブ (1977)

図2：スライド②

子どものけんかごっこなどの社会的遊びと、音楽

社会的遊び(けんかごっこ)そのものが促進されるわけではなく、表現豊かなダンスのような運動が促進された。
スコットとパンクセップ (2003)

幼い子どもにとって、音楽は、想像力に富んだ象徴遊び(演劇など)や物語作りに没頭するための媒体。
Dissanayake (2000)

図3：スライド③

図2・3：子どもの成長と音楽についての研究を紹介した。

音楽に感じる情動
— 一時的、急激な心身の変化を伴うような感情の動き

脳の中の基本情動システム (★2) により、

ヒトは強い興味で世界と関わり、
行為の自由が制限されれば激怒し、
危害があれば恐怖し、
社会的関わりに欲望、配慮、喜びを感じ、
愛する人々との別れに苦痛を感じる。

それと同様の情動をヒトは音楽に引き起こされる。
パンクセップ (1998)

図4：スライド④

★2パンクセップの7つの基本情動

SEEKING (探求心), FEAR (驚怖心),
RAGE (怒り), LUST (性的欲望),
CARE (世話、配慮), PANIC (パニック、苦痛),
PLAY (文化的創造性、楽しさ、美しさを生み出す),

図5：スライド⑤

図4・5：ヒトの情動に関して脳科学に基づくPanksepp (2018) の学説を引用した。

音楽が伝える感情の質
心的能力の最も主観的なもの、物事に感じる心持ち

次第に強く、次第に弱く、消えゆくように、
爆発するように、破裂するように、
引き延ばされるように、はかなく、
脈打つように、揺らめくように、
一生懸命に、ゆったりと、

などの運動用語によってとらえられる。
スターン (1993)

図6：スライド⑥

図6：感情の質がまるで楽語のようであり、音楽的表現と似ていることを指摘した。

音楽のリズミカルな過程

ヒトに備わったリズム (心臓の鼓動、呼吸、
睡眠と覚醒、季節の変化など) を調整し、
身体行為を促し、協調させる。

流れゆく心理的時間を構成し、語る。
Bernardi and Sleight (2007)

図7：スライド⑦

図7：リズムは、ヒトの身体にも自然にも存在することを確認した。

その後、ニュース番組で放映された『楽譜のない音楽団』という、‘音遊びの会’のメンバーの活動を通しての成長を伝える動画—皆で楽譜を見て合唱する学校の音楽の授業についていけず、床にへたり込んでいたが、すくっと立ち上がるとその楽譜を窓から外へ投げるといふ象徴的なシーンがある—と、“What’s beautiful music?”という沼田の講演に収録された‘音遊びの会’のパフォーマンスを視聴した。その後、「音楽って何？」についての自由記述 (400字以上) を課題とした。

3.2 SCATによる記述分析の例

どのような分析をおこなったか、簡単に説明する。

記述例：空気の振動を音として人の耳が感知し、それにある形式、枠組みが与えられたもの。幼少時から和声聴音を遊びながらおこない、音感を身につけた。音楽はハーモニーだと思う。ハーモニーでいつも音楽を聴いている。小学校1年生の時からずっと大変厳しい先生に付いてピアノを学んだため、ピアノの練習もレッスンも嫌で仕方がなかった。けれど、流行の音楽は好きで、四和音を多用した色彩豊かで流れるような曲、郷愁を感じる曲、ノリのいい曲は大好きだった。ずっといつも音楽を聴き演奏してきたので、そのモードが自分自身に反映されているように感じる。‘音遊びの会’のような音楽はずいぶん後になって知ったが、「整然と正しく楽譜に忠実な演奏が良い」という価値観は今やローカルだと思う。文化によって多様な音楽があり、そのどれにも価値がある。人それぞれに音楽の嗜好があり、多様な形式、ルール、組み合わせ、あるいはそれらがなくことによって、眼に見えず実体として感じられない音楽が、人、社会に大きな影響力を持つことは不思議だ。

〈1〉データの中の着目すべき語句 (文) を記入する。

- a 空気の振動を音として人の耳が感知し、それにある形式、枠組みが与えられたもの。
- b 幼少時から和声聴音を遊びながらおこない、音感を身につけた。音楽はハーモニーだと思う。ハーモニーでいつも音楽を聴いている。
- c ピアノの練習もレッスンも嫌で仕方がなかった。けれど、流行の音楽は好きで、四和音を多用した色彩豊かで流れるような曲、郷愁を感じる曲、ノリのいい曲は大好きだった。

d '音遊びの会'のような音楽はずいぶん後になって知ったが、「整然と正しく楽譜に忠実な演奏が良い」という価値観は今やローカルだと思う。文化によって多様な音楽があり、そのどれにも価値がある。人それぞれに音楽の嗜好があり、多様な形式、ルール、組み合わせ、あるいはそれらがなないことによって、眼に見えず実体として感じられない音楽が、人、社会に大きな影響力を持つことは不思議だ。

〈2〉前項の語句を言いかえるデータ外の語句を記入する。

- a 音源からの音の波を鼓膜が感知し、後に脳が意味づけをおこなうことで生じるもの。
- b 幼少時、ゲーム感覚で音当て、和音当てをしたことにより、音感が身についた。
- c ピアノのレッスンの教材は、和声的に単調でつまらないが、技術的には難しく、嫌いだった。社会における音楽（特に□_{M7}, □_{m7}を多用した曲）は大好きで、元気づけられたり、癒やされたり、集中力を高めたり、様々なシーンに有効だった。
- d フリージャズ、フリーインプロビゼーションの音楽は、好んで聴くわけではないが、西洋芸術音楽やポピュラー音楽だけが音楽ではないこと、どの音楽にも背景があり、価値があり、自分たちの物差しで測ることはできないことを理解している。音楽の存在は不思議だ。

〈3〉前項を説明するための概念、語句、文字列を記入する。

- a 文化における聴覚的環境。
- b 文化から自然に学ぶことの事例。
- c 学校教育に通じる楽譜による音楽（ピアノの学習）と、文化の中に自然にある楽譜によらない音そのものによる音楽。音楽の影響。
- d 世界にとっての音楽、音楽の価値は多様である。実体のない（眼に見えず、触れることもできず、形作ることができない）音楽の影響、存在そのものが不思議だ。

〈4〉テーマ、構成概念を記入する。

- a 客観的な音楽。
- b 文化化。
- c 教育における音楽（ピアノの学習）と文化の中の音楽の吸収。音楽の効果。

d 音楽の多様性。音楽の実在性の不思議。

これは、筆者の記述を例としている。同様に学生の記述を言いかえ、コード化をおこなった。

4. 結果と考察

4.1 分析結果

SCAT分析により、①「音楽」の説明、②心理的作用、③音楽の存在の意味、④'音遊びの会'、というコード化をおこなった。

①に関する記述

いろいろな音の混合物がメロディー、リズム、ハーモニーとなって音楽になる。／音が鳴ったら音楽、演奏者が楽しいと思ったら音楽、聴いてる人が楽しいと思ったら音楽、自由に演奏することが音楽、たくさんの意味が含まれているのが音楽。／'音'は人の声、'楽'は楽器の音のこと。／音を楽しむもの。音は楽しむためにある。

②に関する記述

嬉しいときに聴きたい曲、寂しいときに聴きたい曲がある。／音楽があるから助けられた時期もあった。／辛いとき、悲しいとき、うれしいとき、いろいろな気持ちでいるときに聴いて、自分だけじゃなくみんなの気持ちを揺らがせる。／試合の日にはこの曲を絶対に聴くというのがある。／気分を上げてくれる。辛いときや、悲しいときに自分を助けてくれる。／心を安らかにしたり、疲れを癒やしてくれる。／嫌なことがあり落ち込んでしまったとき、楽しいことが起こったとき、勉強をはかどらせたいとき、音楽を聴く。／自分の感情、気持ちに合わせた音楽を聴くことにより、感情や気持ちをコントロールすることができる。明るい曲は元気、やる気が出るし、暗い曲は気持ちを落ち着かせたり、眠くなったりする。／学校でうまくいかないことがあって落ち込んでいたときにゆったりとした音楽を聴くと、気持ちが少し楽になる。試合前にはノリノリの音楽を聴くとテンションが上がって緊張がほぐれる。また、出来事を思い出させてくれ、思い出にもなる。／感情を表すもの。辛いことがあったとき、悲しいことがあったとき、逆に嬉しいこと、楽しいことがあったとき、その場の感情を歌にする。…部活の試合で移動中決まって聴く曲があるが、それを聴かない日は落ち着いてプレーできなかったりする。／自分の思うままに言葉では表せない感情を自由に音にして演奏（表現）する。／音楽を通して自分と

向き合うことができる。／心を落ち着かせる。心を豊かにする。集中させる。テンションを上げたりストレス発散になる。／勇気がほしいとき、自分の心情に変化を与えたいとき音楽を聴く。そして、励まされたり、頑張ろうと思えたり、勇気をもらえたりする。／音楽のおかげでいろいろなことを乗り越えてきた。悲しいとき、辛いとき、孤独を感じる時こそ、その力を感じる。…音楽のおかげでアイデアが浮かんだり、一人じゃないんだと思えたり、感情的になって泣くこともある。／歌詞をじっくり聴くと心に響く。うまくいかないことがあったり、ショックなことがあってテンションが下がったときに聴くと、気が楽になる。／失恋したときに聴くとなぜか少し泣ける。友達と一緒に歌って楽しむ。不安になったとき聴いて勇気が出る。／ものを覚えるとき、数えるとき、音楽を利用する。さみしいとき、眠れないときに聴く。

③に関する記述

生きがい。／なくてはならないもの。／生活の一部。／趣味。／とても大切なもの。／その人らしさを表現するもの。／世界共通に楽しめるもの。／心の支え。／そこら中にあふれ、社会を向上させるもの。／仕事の環境を良くするもの。／世界を彩るもの。／いつもあるもの。／身近なもの。／つながりを生み出す。／コミュニケーションの手段。／テレビにしろ、街の中にしろ、あるのが当たり前。／人生そのものといっても過言ではないほど大きな影響を受けた。

④に関する記述

とても生き生きして見えて、言葉では上手く表現出来ないことも、楽器を演奏したり、床を叩いてみたりして、音を奏でていてとても凄いなと思いました。／楽譜という型にとらわれず自分が表現したいものを自由に表現し自分の気持ちを表して演奏ができる‘音遊びの会’という存在はとても大きいだらうなと思った。うまく自分の気持ちを表現できない子が‘音遊びの会’を通して、言葉では表現できなくても態度や行動で自分の気持ちを表現できるようになっていたことは、その子にとって大きな成長だと感じた。映像の中にあつた“彼が演奏する曲は毎回新曲”という言葉が耳に残っている。型にはめて作詞や作曲を行い1つの曲を完成させるのには相当な時間がかかる。でも彼らにとって今演奏している曲は、今の自分の気持ちを表す“新曲”であり、ある意味音楽を創る天才なんだろうなと思った。／障がいを持った方にとっての演奏会は練習で奏でたりリズムではなく、その日に演奏するリズムがその人たちにとっての演奏になるのです。だか

ら、障がい者にとって音楽とは、決められた音楽の中だけでなく、自らが作り演奏したり、人が演奏しているのに対して思うがままに体を動かすことも音楽なのだと思います。／楽譜もなく、正解もなく、楽しそうに音楽をしている。特に印象に残ったのは、掃除機の演奏である。掃除機って楽器じゃないのに、なんて固定概念を捨てて、みんな楽しそうで、音楽って奥が深いなと感じた。／障がいのあるひとたちは素直な心を持っている人が多いと感じた。音楽を聴いた時に自分の心の中の気持ちを素直に表に出して自分の思う音楽をしているなと感じた。／楽器を弾いている人も歌っている人もそれを聞いている人もみんな楽しそうにしていました。／みんながそれぞれ好きなように演奏している姿を見て昔の自分の姿を思い出して、自由に演奏ができることの楽しさを改めて思い出すことができました。／どんな人でも音楽は演奏することができるし、だれでも自由に表現して制限なく様々な音を出せたり歌を歌えたりする。音楽をすることは誰でも楽しむことができ、自由に演奏できるからこそ障がいという壁も乗り越えることができ、同じ楽器や同じ曲と一緒に演奏できて差別なく共有できる貴重なものである。／障がいをもった方が音楽を通して人とコミュニケーションをとるといったものだった。自分の気持ちを言葉に出して伝えることが難しい人でも音楽を通してなら伝えることができると思った。音楽だからこそ素直に伝えられると思った。／音楽を通して、ほかの人と触れ合いながら、成長できるのだと実感できました。／障がい者の方の音楽会は見ていてとても楽しいものでした。決まりの無い楽譜には、たくさんの可能性があると思います。自分の思うままに音楽をやること、自分が好きなように音楽をやることはとても楽しいことだと思います。このような演奏会が増えていくことを願っています。障がいを持ちながらも、好きなことに夢中になれることは、とても素晴らしいことだと思いました。知的障がいの方、身体障がいの方、精神障がいを持っている方が、心から楽しめるもののひとつが音楽であると思いました。ピアノ、鍵盤楽器、太鼓、ヴァイオリン、弾き方も叩き方も、ちゃんと楽器を扱っている人から見たら、扱えていないかもしれないけど、その方たちが楽しめているのを見るとそのようなことも忘れてしまうと思います。

以上の記述から、学生にとって音楽は、楽しい、好きだという言葉で表現される次元を遙かに超えた大切なものであることがあきらかになった。また、④に関

する記述から、逆に楽譜通りに演奏しなければならない音楽実践が、学生にとって楽しくないというメッセージになっていると推察される。

次節ではもう一度、音楽とは何かという問いに立ち返り、音楽と感情、音楽の存在、音楽と楽譜について検討する。

4.2 考察

音楽は、表現しながら、同時に表現せず、真剣でありながらたわいなく、奥深くて皮相にとどまる。音楽はある意味をもっていながら意味をもっていない。音楽とは無益な気晴らしなのか。それとも暗号で綴られた言語、ある神秘を表現した象形文字のようなものか。…音楽ののろいのような力と、音楽美の根元からの不明証性とのおいだには、戸惑わせる対照、皮肉で耐えがたい不均衡がある。ときに、崇高な、気も転倒させるような明証さが、このどちらつかずを徹底的に排除するように見える。…音楽の力と音楽の曖昧さとの間に認められる解決することができない矛盾だ。音楽の及ぼす魅力は欺瞞なのだろうか。それとも1つの知恵の原理なのか。これら矛盾するものを結び合い言葉は、まさに魅力の触知することのできない働きと、時を唯一の次元とする創作行為の無心さのうちにあるのではないか。

—Jankelevitch, V. (1995)

上記に述べられた音楽の相反する二面性に加え、人それぞれにとって音楽の存在があまりにも固有の出来事であるために、音楽を定義することは難しい。

多くの学生が、日常的に音楽の心理的作用に助けられながら生活していると推察されることから、最初に、音楽はどのように学生の心に寄り添い、作用を及ぼすのかについて考える。音楽は感情を表現する感情の言語であるといわれるが、その素材は、音の動き、高さ、強さ、音色等であり(前川:1995)、それらの組み合わせ(形式)により感情を表現すると、一般的には考えられている。しかし、前川(1995)によれば、音楽は感情表現を目的とするのではなく、ただ人を美的に印象づけ、組織づけられた音響素材のある種の感覚的性質であるという。そして、音楽の諸特徴に対応する感じ(擬似感覚²¹⁾)—例えば、上行下行といった運動(音高に関して実際にそのような空間的高低があるわけではない)、強弱、音色であれば明るい暗い、温かい冷たい、硬い柔らかい、テンポの速い遅い等—が、感情と結びつく(同上)。これは、音楽を

音としてみたとき、本来そこに備わっていない性質を、音楽に認めているのであり、擬似感覚は実際の感覚ではないために、より感覚的であるという(同上)。では、この感覚が、どのように感情に繋がるのだろうか。前川(1995)は、「音楽が持つエネルギー感、未来へ向かうエネルギー感」が人の心を動かし、音楽が進むにつれその音楽の変化により、一層の感情を引き起こすと述べている。

音素材の特質から感情を生じさせる他に、筆者は、音高の定まった学生に馴染みのある音楽のリズムと、ハーモニーの変化が大きな心理的作用を及ぼすものと考え。軽快で楽しい感じ、あるいは重苦しく激しい感じは、リズムに負うところが大きい。ハーモニーの変化は、雰囲気、気分、感情の変化を引き起こす。例えば、洗練された都会的な感じ、きらきらと水面が輝き、風がそよぐ感じ、楽しい気分、悲しい気分、懐かしさ、切なさ、等である。そして、最も重要な要素が歌詞である。洋楽で言葉の意味が理解できないとき、言葉の音は音楽の素材の役割を担う(同上)。J-Pop等言葉の意味が理解できる時、言葉と音楽の関係はどのようなものだろうか。本来言葉は、何らかの内容を相手に伝えるためのものであり、受け取る側もそれを相手の言葉として引き受けるが、歌詞の場合、相手に向けられた言葉ではなく自分の側にある言葉で、意味を持つ言葉は音楽的音のレベルで音楽の他の部分と関係を持つものになり、日常の言葉ではなく音楽化された言葉、音楽によって変質された言葉になる(同上)。また、歌詞は歌い手その人の言葉ではなく、普遍性を与えられた言葉として聴き手に届き、言葉の意味は音楽によって強化されている(同上)。つまり、音楽は、言葉の現実性を犠牲にすると同時に言葉の情動的機能を強化し、聴き手に訴える力を増すのである(同上)。音楽がなぜ学生の心の支えとなり得るのかについて、前川(1995)は、「音楽においては過去、現在、未来がセットで意味をなし、未来のために現在があるわけではない。…音楽的時間において、未来の未確定性=不安は基本的にない。未来は現在との必然的つながりの中にある。音楽は日常ではあり得ない、不安とは無縁の時間体験をもたらす。…音楽活動の過程は不安のない期待であり、充実した時間である。活動の時間は音楽がたどる時間であり、…一音一音を位置づけて全体を作っていくことである。音楽においては現在が過去とも統合されている。自己が自己であるためには、過去と現在との間に連続性がなければならない。」「音楽は、疎外や不安から解放された充実をもた

らす。自己と音楽とだけで体験として完結し、音楽活動は疎外から自己を回復し、自己を見つめ、確認する場でもある。聴く行為…諸音の必然的な結びつきを実感することは、諸音を関係づけるわれわれの活動そのものを実感することである。音楽的現前は、われわれ自身の現前でもある。能動的な活動の中で自己を見出すのである。そして、音楽体験には目的にとらわれない、また、外から束縛されない自由があり、そこにいるのは、解放された自律的な自己である」と述べている。学生は様々な困難に立ち向かうために、あるいは困難に打ちのめされ、そこから立ち直るために、音楽(歌)を聴き、歌って、自分を取り戻すのだろう。これまで聴くという行為にあまり能動性を見出せなかった筆者に、この前川のとらえ方は大きなインパクトを与え、学生の音楽に関する記述が、決して大げさなものではないことがわかった。

他方、Panksepp (2018)によれば、音楽は脳内ホルモンの分泌を促し、ヒトの精神、情動に様々な影響を及ぼすことが客観的にあきらかにされつつあるという。

次の音楽の存在の意味に関しては、個人→集団→社会のレベルでとらえ直すと、個人にとってはとても大切に不可欠なものであり、集団にとってはつながりを生み出しコミュニケーションの手段となるもの、社会にとっては環境を整え向上させるもの、とおおよそ、学生は考えていることがわかる。ここで集団レベルの音楽の存在について、他者と美しい音楽体験をもたらす同じ1つの音楽を共有することが、人同士を結びつけ、「音楽は何も伝えないが、それでもグループの中で媒介し、その社会文化的に同質なグループにおいて、独りではないことを確認するという(同上)。そして、音楽の体験は個人に根ざしていて、そこから同じ音楽を共有することで他の個人へと繋がっていくことが可能となり、「自分という重心を確保した上で他の者と関わるができる」点で、「音楽は言語にない強さで人間同士を結びつける働きを持つ」という(同上)。

最後に、「音遊びの会」についての学生の記述から、楽譜による規則に縛られたつまらない音楽(=学校教育の音楽)に対して、「音遊びの会」の音楽は、学生にとって馴染みのない無秩序な音楽であるにもかかわらず、「楽譜も固定観念もなく、自由にみんなが楽しんでいる音楽」ととらえられていることがわかる。音楽と楽譜の関係について、楽譜は時間芸術とされる「音楽の時間的側面を空間化することで、現在性を実

現する」ものであり、演奏者に、いかに音楽を作るかを教える(同上)。つまり演奏者は、楽譜によって規定されている通りに演奏することを期待され、楽譜を基準に演奏の内容も評価される。一方、ピアノ初心者の学生にとって、楽譜は大変厄介な存在である。小泉(1977)は、「何の指でどこをどれだけ押さえずなくちゃならない、というように一挙手一投足全部楽譜に書いてある。…人間の行動を規制しているものでも、あれほど厳密に人間の挙手一投足をきっちり紙に書いたものは、ほかにないんですよ。…どのぐらいの強さで、どのぐらいの表情で、ここでは喜びなさい、ここでは悲しくやりなさいということまで全部コントロールするという、怖ろしい…制御装置ですね、それに馴れるように、その命令に従うようにという訓練を毎週毎週…やるわけです。だからピアノ教育を通じて…いかに型にはめられ、そして人間性を失っていくかということが、はっきりわかるんですよ。」と、楽譜に縛られたピアノ教育を痛烈に批判している。読譜中心の、楽譜によるピアノ演奏技術習得の方法は、ピアノ嫌いを生み出すことに繋がっているのではないだろうか。

筆者が担当する器楽演習の授業に関して、課程を終えた学生の41.7%が「できるようになったら楽しい」と感じているが、逆に58.3%は「楽しい」と感じていないことがわかる(高崎:2020)。クラシックの楽曲は、楽譜を忠実に再現するというルールがあるため、それに従って指導する必要があるが、こどもの歌等は、もっと工夫次第で楽しい教材に変えることが可能である。そもそもピアノの演奏技術を学ぶために、こどもの歌を教材にしなければならないのだろうか。音楽をこれほど身近に感じ、大切に思っている学生に対して、それに応える授業がおこなえないことは、非常に残念でならない。もっと学生の音楽性に合う教材を取り入れた、多様な活動から成る授業に改善する必要があるのではないだろうか。

〈注〉

- 1) 『標準音楽辞典』(1966)。
- 2) Sulzer, J. G. 1720~1779年。電気学者、哲学者。
- 3) Nägeli, H. G. 1773~1836年。作曲家。
- 4) Hanslick, E. 1825~1904年。音楽評論家。
- 5) СТРАВИНСКИЙ, ЁФ. 1882~1971年。作曲家、指揮者、ピアニスト。
- 6) 2008年第8次学習指導要領のもとで、学生は学校教育の音楽の授業を受けてきた。
- 7) I・V・IVは長調の主和音になり得る長三和音で

- ある。
- 8) 長三和音の第三音が半音下がったもの。短調の主和音になり得る。
- 9) 他の調の和音を借用したもの。
- 10) 三和音に7度、9度、11度、13度の音加わった響き。例えば、「C」には、 $C_{M7} \cdot C_{m7} \cdot C_{m7-5} \cdot C_{dim}$ …等、多様な響きがある。
- 11) 総務省統計局（2011）『社会生活基本調査』より。
- 12) Csikszentmihalyiによれば、「全人的に行為に没入している時に人が感ずる包括的感觉」のこと。
- 13) メロディー・リズム・ハーモニーのこと。
- 14) 音楽の先生たちの大部分は、まず読譜して楽譜を演奏するが、その手順は、子どもたちが文化から学ぶ音楽実践とは異なることをいっていると推察される。
- 15) 日頃のストレスを解消し、さっぱりすること。苦悩などを表出し、コンプレックスを解消すること。—『新明解国語辞典第二版』（1979）三省堂。
- 16) 自分の感情、欲望、感覚を押し込める外界対象。—丹野義彦・石垣琢磨他（2015）『臨床心理学』有斐閣。
- 17) トランス=越える、移ると、パーソナル=個人、性格から、個体的、個人的な事物を超越すること。または、性格を変えること。—小川芳男他（1972）『WEBSTER'S ESSENTIAL ENGLISH DICTIONARY』ブリタニカ。
- 18) 1～3歳頃、肌身離さず持っているぬいぐるみ、タオルなどの客観物。
<https://psychoterm.jp/clinical/theory/transitional-object#:~:text=>
(2021年1月5日閲覧)
- 19) 当時神戸大学大学院博士後期課程に在籍。現在大阪市立大学。
- 20) 地域社会に根ざした音楽療法の実践（沼田：2010）。
- 21) 対象が現実に持っている性質による感覚ではないが、「～気がする」というあやふやなものではなく、確かにそのように感じられるもの（前川：1995）。

〈参考・引用文献〉

- Aigen, K. (2002) 『障害児の音楽療法』中河豊訳 ミネルヴァ書房 pp.241-277
- Bruscia, E. K. (1999) 『即興音楽療法の諸理論 [上]』林庸二監訳 人間と歴史社

- Cavaye, R.・西山志風（1987）『日本人の音楽教育』新潮社 pp.61-90
- 畠澤郎（2008）「学校音楽の課題と展望」鹿児島大学教育学部研究紀要 59 pp.1-10
- （2012）「わが国における音楽教育の課題」椋山女学園大学教育学部紀要 5 pp.241-250
- 小泉文夫（1977）『音楽の根源にあるもの』青土社 p.248
- 前川陽郁（1995）『音楽と美的体験』勁草書房
- 沼田里衣（2010）「コミュニティ音楽療法における音楽の芸術的価値と社会的意味—アウトサイダー・アートに関する議論を手掛かりに—」日本音楽療法学会誌10巻1号 pp.95-109
- （2017）「臨床音楽学研究試論：音遊びの会の事例を通して」日本音楽療法学会誌17巻2号 pp.124-139
- 小川芳男他（1972）『WEBSTER'S ESSENTIAL ENGLISH DICTIONARY』ブリタニカ
- 大谷尚（2007）「4ステップコーディングによる質的データ分析手法SCATの提案—着手しやすく小規模データにも適用可能な理論化の手続き—」名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要 54. 2. pp.27-44
- Panksepp, Y. (2018) 「音楽における情動の神経科学」福山寛志訳 Malloch, S.・Trevanthen, C.『絆の音楽性 つながりの基盤を求めて』音楽之友社 pp.101-140
- 佐藤峰雄（1996）『ピアノ入門書再考』音楽之友社 pp.107-119
- 浅香淳編（1966）『標準音楽辞典』音楽之友社
- 高崎展好（2020）「保育者養成におけるグループレッスン指導のためのピアノ弾き歌い教材開発—授業実践結果から見る開発教材の有効性—」環太平洋大学研究紀要第16号 pp.7-16
- 丹野義彦・石垣琢磨他（2015）『臨床心理学』有斐閣
- Vladimir Jankelevitch（1995）『音楽と筆舌に尽くせないもの』中澤紀雄訳 国文社
- 安田寛・塚田健一・有元典文・小川昌文（2017）「音楽と音楽教育の原点から音楽科教育を再考する」音楽教育学46-2 pp.49-56

〈楽譜〉

- 坂井康子・岡林典子・南夏世・佐野仁美編著（2008）『こどものうたマイ・レパートリー』ヤマハミュージックメディア

〈オンライン動画〉

『楽譜のない音楽団』

https://www.youtube.com/watch?v=QqYVmXdB8xE&feature=emb_logo

(2021年1月6日閲覧)

“What is beautiful music?”

https://www.youtube.com/watch?v=BFgvhZ14hDI&feature=emb_logo

(2021年1月6日閲覧)